

第21回特別展

清滙越えの道

一般国道163号の発掘調査より



2006.10.17～12.10

特定管理者 株式会社日立ビルシステム

四條畷市教育委員会

国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所

清滝越えの道

はじめに

『清滝越えの道』は古道清滝街道と一般国道163号をさしています。

四條畷の中心を東西にはしる古道清滝街道。古くから難波から清滝峠を越えて大和へつながることで政治・経済を支え、寺町での人々の心を癒してきました。

古道清滝街道にそって新しくつられた一般国道163号。この道も清滝街道と呼ばされました。高度経済成長期、一般国道163号を経由して、生駒山系から運び出された土砂は大阪府下の土木工事を支えました。ダンプカーが勢いよく行き交いダンプ街道と呼ばれるようになりました(9ページ)。

その後も車社会に拍車をかけ渋滞や危険はまぬがれませんでした。それらを解消するために道幅をひろげる工事や高架にするための整備がおこなわれました。その整備に先立って昭和63年より発掘調査が進められ、平成16年に終了いたしました。16年間の発掘調査は大きな成果をあげました。

平成18年、清滝生駒道路が4車線開通したことを機会に、清滝街道のあゆみと時代の移り変わりをご覧いただけたら幸いです。

この冊子を作成するにあたり国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所をはじめ多くの方々にお世話になりました。

厚くお礼を申し上げます。

四條畷市教育委員会



苦しい清滝越えです。奈良はまだまだ遠い道のりです。

「もうすぐ峠の邊阪ですよ」

「あらッ、小さな祠が、ちょっとおまいりにいきましょうか」

多くの人々が清滝街道を利用しました。

高架4車線道路一般国道163号(清滝生駒道路)の地下深くは、かつて谷地形でした。ここに古墳が造られ、川も流れていきました。この川では、古墳時代に朝鮮半島から馬をつれてきた渡来人やその子孫が繰り返しまつりをしていました。奈良時代には、都と同じまじないをしていました。

そして、まつりで使った道具や土器をその場に残しました。

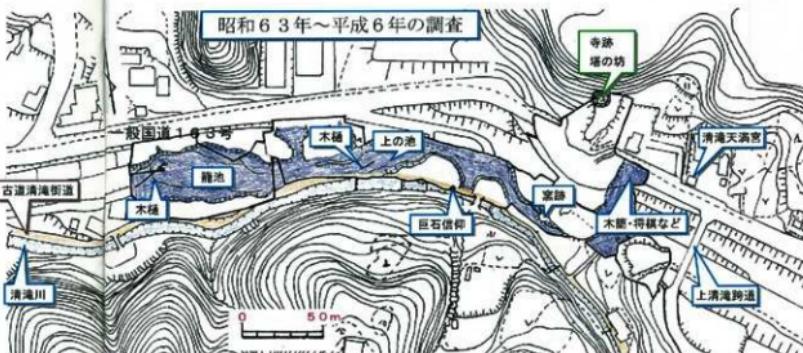
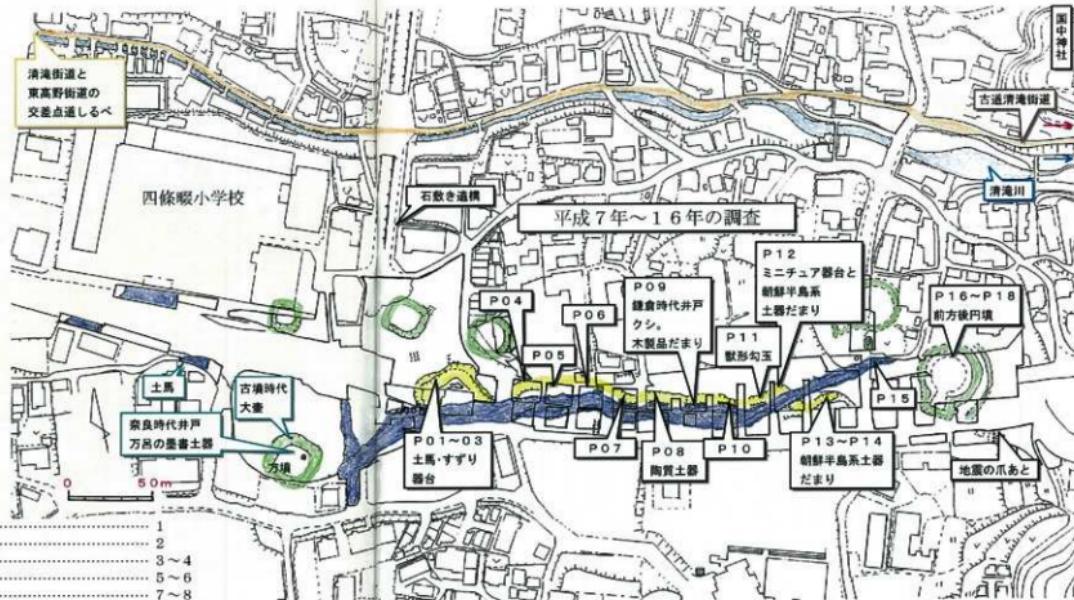
また、仏教の広まりによって街道周辺に寺院が建てられるようになりました。街道を行き交う旅人を道ばたのお地蔵さんが見守りました。

目次と地図

漢字川
 古道 清瀬街道
 古墳
 川跡(古墳時代～奈良時代)
 川跡(奈良時代～室町時代)
 黄色に彩色した川跡から多くの調査成果を得ました。

P(ピア)は、高架道路の各橋脚の記号

はじめに	1
清瀬越えの道	2
目次と地図	3~4
昭和初期の清瀬街道のすがた	5~6
清瀬街道のあゆみ	7~8
なつかしい一般国道163号のすがた	9~11
木間池北方道路・城道路の調査	12
土馬をもったまじない(P01~03)...	13~14
四角い形の古墳(方墳)...	15
器台(P01~03)...	16
長い網のカギと装飾品...	17
朝鮮半島から来た土器(陶質土器)(P08)...	18
木製品だまりと黒髪をすいたクシ(P09)...	19~20
帆形勾玉(P11)...	21
帆形勾玉と石書き遺構...	22
渡来人のまつ(P12)...	23
朝鮮半島系の土器だまり(P13)...	24
前方後円墳(P16~18)...	25~29
上清瀬道路の調査	30
田畠をうるおした鏡池...	31~32
膨らむ民衆信仰の寺跡(塔の坊)...	33~35
巨石信仰 大きな岩にも神がやどる...	36
瓦器柄をいたる跡...	37
地震の爪あと 大災害にみまわれた四條畷...	38
表紙によせて...	39
あとがき	40





燕屋の清瀧街道
みちしるべ

清瀧街道は、ここから発し、田原から
磐船街道へつながります

昭和初期の清瀧街道のすがた

北



清瀧街道と東高野街道
の交差点道しるべ

山手のほうへのびる道が清瀧街道。
手前の広い道が東高野街道



四條郷となるまで

昭和 7 年 甲可村から四條郷村となる
昭和 22 年 四條郷町となる
昭和 36 年 田原村と合併
昭和 45 年 四條郷市となる

のどかな田園風景

前方後円墳の忍岡古墳や墓ノ堂古墳の姿がはっきりと見えます。

一般国道 163 号や 170 号などの姿はまだありません。

村役場は古道清瀧街道ぞいにありました。

法務局・枚方裁判所甲可出張所(現歴史民俗資料館)は東高野街道ぞいにありました。

この辺は田んぼの中に集落が点在していますが、昭和 40 年代には農具の機械化と宅地化が進み現在のような姿となっていました。

古来より四條畷を東西に走る古道は、大和街道清滝越え・大坂越えなどと呼ばれ、四條畷市から奈良県斑鳩町に至る街道として多くの人々が往来しました。

清滝峠は、中世には逢阪千軒といわれ、賑わいました。明治の初めごろは、茶店4軒・副業的旅館1軒があり旅人の疲れを癒しました。

清滝越えの道は一般国道163号となり、時代を超えて多くの人々に愛されてきたのです。

明治25年

このころから古道が改修され、35年には一部ですが今の国道の原型となる道が完成、清滝街道の名称が使われるようになりました。

昭和20年代

木炭車が走り、のぼり道では子どもたちが手伝って車を押していたという話がありました。

昭和28年

一般国道163号に指定されました。(いつしか四日市線とも呼ばれていました)

昭和37年

道路が改良され、生駒山地北部の横断路として重要性が高まりました。

昭和55年

清滝生駒道路はこのころより高度成長期真只中で、清滝から大量の山土が大阪市内に運ばれ、一般国道163号の昼間交通量は12,000～13,000台に達しダンプ街道と呼ばれるようになりました。

清滝生駒道路はこのころより周辺の測量・調査と一部用地買収に着手。

昭和60年

一般国道163号では一日18,000台と交通量が増えていきました。

1月、清滝トンネルの工事に着工しました。

昭和63年

道路整備のため順次発掘調査を行い、成果をあげました。

平成2年

一般国道163号では一日25,000台の交通量があり過饱和状態となっていました。また、急勾配(最大8%)急曲線(最大20m)のため降雨量による通行規制区間に指定されました。

2月に延長約1,100mの清滝トンネルが貫通。大阪・鶴見緑地で開催される「国際花と緑の博覧会」にむけて一部整備され2車線暫定供用となりました。

平成10年

12月に清滝生駒道路のうち、四條畷市中野から生駒市高山町間延長約8.0kmが地域高規格道路整備区間に指定されました。

平成18年

清滝生駒道路は、四條畷市中野から同市清滝間延長約1.9kmが4車線で供用されました。

この整備により、沿線の宅地開発や関西文化学術研究都市などによる交通渋滞や急カーブ及び急勾配などの課題が4車線化によって改善され、走行性、安全性、快適性などの交通機能が向上しました。

開通した4車線高架道路

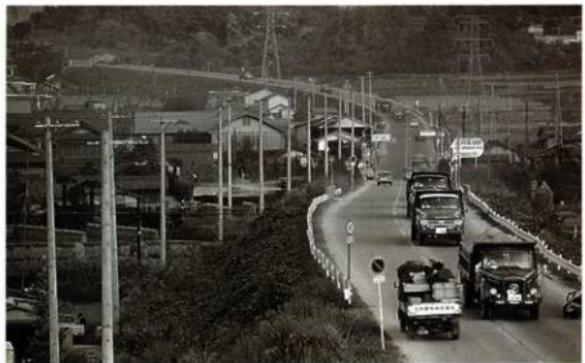
手前の橋脚周辺から、14ページの土馬やすすり、16ページの器合などが見つかりました

(調査中の写真は12ページ)





城遺跡あたりから大阪方面を見る 現在は4車線高架道路になっています



ダンプカーが勢いよく行き交いダンプ街道とよばれました(片町線付近)

村川義夫氏写真提供



平成2年、籠池に注ぐ川の調査 ダンプが勢いよく走ります



この頃も土を盛り上げた道路 平成8年撮影(北から)



大阪方面の車線が高架道路となっています 平成16年撮影(北から)



写真中央あたりの道路の左側を調査しています 平成16年撮影(西から)

(1995～2004)

縄文時代～鎌倉時代
木間池北方遺跡 城遺跡



奈良方面の車線の高架工事にともなう発掘調査 平成15年 P01～03

調査地周辺は古墳時代中期から後期にかけて古墳群が築かれた地域です(大上古墳群と清瀧古墳群)。これらの古墳には、馬の埋葬もみられ、馬飼集団の墓域として知られています。

白鳳時代には、この古墳群を整地して正法寺が建立されました。この大規模開発によって多くの古墳が破壊されました。

奈良時代になると正法寺をとりまくように人々が生活するようになり、奈良の都と同じようなまじないがおこなわれました。

この調査によって、渡来系の人々の生活範囲が山手までひろがっていったことや、今まで市内で確認されていなかった奈良時代の集落が初めて発見されるなど、大きな成果をあげました。

P(ピア)は高架の各橋脚の記号



土馬 平成 7年調査

まじないの流行

奈良時代の平城京では、雨乞いや疫病を払うまじないが流行し、周辺の地域に広まっていきました。まじないは川や溝などの水辺でおこなわれ、土馬や土器類が使われました。

川の流れが穢れを流し去ってくれると信じたのでしょう。

こわして川へ流す

見つかった土馬はこわれて完全なものはありません。壊すことに意味があるのでしょう。

土馬は、スマートなもの、ずんぐりしたもの、ユーモアあふれる表情をしたものなどバラエティーにとんています。



すずり 13ページの土馬と一緒に出土



『口万呂』と名前を書いた土器片



すずり P01~03



土馬 P01~03

すずりは、土馬と一緒に見つかりました。正法寺に関わる人々が川辺でまつりをしたのでしょう。

四條畷で最古の文字

『口万呂』と人名を描いた土器片は、およそ1300年前のもので、四條畷で一番古い文字史料です。とても小さなですが貴重です。





方墳の調査 平成7年撮影(南から)

古墳時代中期の古墳です。調査地内で全体の約1/2が見つかりました。一边が20m以上の四角い形をした方墳に復元することが出来ます。

古墳をとりまく周溝は、幅約7m、深さ約90cm。ここから高さ65cmの大壺などをはじめとする土器類、円筒埴輪や家形埴輪などが見つかりました。

残念なことに主体部(亡くなった人を埋葬していた場所)は削られて残っていませんでした。



古墳の上に井戸…?

後の奈良時代の人が、この古墳の墳丘部に井戸を掘っていました。その井戸の中から『口万呂』と墨書きされた土器の破片が見つかっています。(4ページ)。

仏教が広まるごとに古墳造りは流行おくれとなり、古墳が破壊されることが多くなりました。



須恵器の器台 (壺を載せる台)

ハイテク技術

硬く焼き締められた須恵器の器台です。脚部は筒形で、長方形の透かしが5段あります。残念なことに鉢部は残っていませんでした。

その他、鉄斧・ミニチュア土器、朝鮮半島系のカメ・片口ナベ・蒸し器があります。

古墳時代の中ごろ、朝鮮半島から新しい技術が入ってきました。馬の飼育技術は四條駆へ、硬く焼める須恵器の焼成技術は堺市。製鉄技術は柏原市。他に金工技術や土木技術などがあります。渡来人は文化発展に大きく貢献しました。



格子目タタキがほどこされた朝鮮半島系の土器(韓式系長胴カメ) P 0 7

朝鮮半島系の土器の特徴

専門用語で韓式系土器といいます。土器の表面に施された格子目のタタキや土器の底が平らになっていることなどがあります。四條腰では平底のカメが普遍的に見られますが、このような胴が長いカメは多くはみられません。(土器の形は20ページ参照)



調査で見つかった古墳時代の装飾品(管玉・臼玉)



陶質土器(朝鮮半島から来た土器) 高さ 23.3 cm

この土器は焼成のときにできる胴部のくぼみが特徴です。朝鮮半島の百濟で焼かれたと考えられています。

これと同じ形をした土器が、四條腰小学校のプール工事や、市道清滝中町1号線道路の発掘で発見された前方後円墳からも見つかっています。

馬が王権を支えた

古墳時代に朝鮮半島から馬をつれた渡来人が地元の人々と力をあわせて馬の牧場を開きました。馬の飼育や乗馬の技術は、王朝の軍事・運輸などを支え、王やそれに仕える豪族の力を強固なものにしました。





古墳時代の木製品だまりと
鎌倉時代の井戸

川跡が2筋。左側の川が古墳時代～奈良時代の川跡。左下の丸い穴が鎌倉時代の井戸(約 $6.5 \times 5.5\text{ cm}$)。井戸の底に直径 30 cm の曲物を設置。その中からクシが出土。



鎌倉時代の井戸の中から発見
黒髪をすいたツゲ製のクシ。
長さ 11.5 cm
あくまでも長い黒髪が美人の条件の一つでした。



川跡の木製品だまりで朝鮮半島系の土器をはじめ、ホーク形のスキの先・人形木製品・キヌタ・盤などが見つかりました(左ページ上の写真)



盤(食物などを盛り付ける)



木製品だまりから見つかった朝鮮半島系の土器 表面に格子目タキのもうよう
前列の3個が平底のハチ 後列左が胴の長いカネ 右が把手付片口ナベ



★印のあたりから獣形勾玉発見 平成16年調査

全国的に珍しい獣形勾玉

川跡の底からヒスイ製の獣形勾玉が見つかりました。

このような形をした勾玉は弥生時代前期から中期にかけて見られるもので、縄文時代の特徴を備えています。

拠点的集落のリーダー

このような勾玉は大きな村のリーダーが身につけていたと考えられています。

この近くにある弥生時代の遺跡(石敷き遺構: 22ページ)と関係があるかもしれません。



ヒスイ製獣形勾玉 長さ3.2cm
弥生時代前期



参考資料 石敷き遺構 平成4年調査 (一般国道163号の近く)

勾玉の持ち主がまつりをした?

石が一面に敷き詰められ、弥生時代前期の土器片が散乱していました。このような状態は普段の生活に必要とは考えられません。この場所で、何らかのまつりごとをしたのかもしれません。



川跡から見つかったミニチュアの器台と韓式系土器だまり

土器だまりで朝鮮半島系の把手付片口ナベ、蒸し器、平底のカメ、ミニチュアの器台などが見つかりました。(土器の形は20ページ参照)

この川跡では数箇所で祭祀の跡がみられますが、朝鮮半島系の土器が多く使われているのが大きな特徴です。



ミニチュアの器台

渡来人のまつり

ミニチュアの器台は糸巻きのような形をしています。取り上げてみると17個もありました。

四條塚ではまつりに使われたミニチュア土器がたくさん見つかりますが、このような形をしたものは初めてです。朝鮮半島でもよく似たものが見つかっています。



大量の韓式系土器の破片

格子目のタタキが施された朝鮮半島系の土器が大量に見つかりました。

内訳は平底のハチが一番多く、長胴のカメ・製塩土器などです。これらは、すべて小さな破片で完全に復元できるものはありませんでした。

他に装飾品の滑石製白玉があります。(17ページ)

★ 平底のハチ・胴の長いカメは20ページを参照



ワッフルのよう

朝鮮半島系の土器の形は20ページを参照してください。表面にワッフルのような格子目タタキのもようがついています。



前方後円墳（全長約45m古墳時代後期）平成15年度の調査

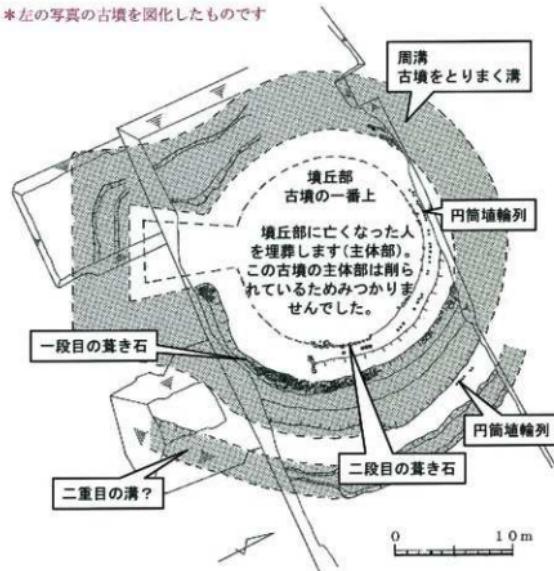
前方後円墳は権力のあかし

調査地周辺は大上古墳群や清瀬古墳群がひろがる地域で、前方後円墳や横穴式石室をはじめ円墳や方墳など多数発見されています。そのなかには、馬の埋葬も見られ、馬飼い集団の墓域として知られています。この古墳は、四條塙における古墳時代後期の前方後円墳としては最大です。

このあたりは、白鳳時代に正法寺建立や、田んぼの造成によってほとんどの古墳が破壊されています。

このような残りの良い前方後円墳の発見は四條塙で初めてのことです。

*左の写真の古墳を図化したものです



河内馬飼首荒籠の墓か？

古墳を取り巻く周溝のほかに、円筒埴輪が立てられた溝(周溝?)が見つかっています。このようなことから周溝が二重にとりまく可能性も考えられています。二重の周溝を備えた前方後円墳となると、この古墳の被葬者は、馬飼のリーダー的存在の人物が浮かび上がってきます。

荒籠は、馬を走らせ、渡来人のネットワークで情報収集し、維体天皇即位へと導きました。



周溝と葺き石

周溝の幅はおよそ3~6m・深さ約1.5mです。

古墳の上の部分(墳丘部)は削られているものの斜面の葺き石部分がきれいに残っています。下に大きな石を並べて、その上に少し小さな人頭大の石を貼り付けています。葺き石の積み方や石のサイズ別の使い方などが観察できます。



周溝の様子

古墳をとりまく周溝の内から、墳丘部から転落した円筒埴輪や盾形埴輪などの埴輪類をはじめ須恵器や土師器などの土器類が見つかっています。

周溝の中から埴輪や土器が見つかるわけ
古墳が出来たころは、古墳の上に埴輪や儀礼で使った土器が置かれていましたが、長年の間に倒れたりこわされたりして、周溝の中に落ち込みました。



周溝に転落した円筒埴輪と葺き石

周溝から見つかった埴輪は、円筒埴輪・鞆形埴輪・衣蓋形埴輪の破片です。

この古墳の年代は、古墳の形や埴輪や須恵器の形式を参考にして古墳時代後期と決定しました。

古墳の周辺から韓式土器や韓式系土器が大量に見つかっています。このようなことからみても渡来系の馬銅集団のリーダーの墓ではないかと考えられます。

古墳時代後期の年代を決定する手がりとなっ
た須恵器の杯(容器)

昭和63年～平成6年の調査 (1988～1994)

平安時代～室町時代
上清滝遺跡



寺跡（塔の坊）調査中航空写真（上清滝遺跡から清滝トンネル方向）昭和63年撮影

曲がりくねった一般国道163号。道路中央の左側が寺跡の調査地。トンネルは工事中です。写真右の山そとに古道清滝街道が走り、清滝川が流れています。

仏教が民衆にもひろまるとなれば、古道清滝街道の山中に山岳寺院が建てられるようになりました。お寺や道ばたのお地蔵さんにお参りしながら疲れを癒して、駄をこえたのでしょうか。

また、水田開発も活発になり、大規模なため池が造されました。この調査で、中世の精神生活を知ることができたとともに、水田を営む熱意が伝わってきました。



籠池の調査中の航空写真(遺跡から大阪方面) 平成元年(1989)撮影

写真中央の黒い土が籠池、そのまわりに堤。左側の山すそに、古道清滝街道が走り、清滝川が流れています。かつては、多くの人々が行き交った道もほとんど通る人もなく細い道となっています。



調査中の籠池

みるとみるうちに水がたまつできました。池の大きさは、東西30m・南北22mの約660m²です。

樋の役割

すぐそばに清滝川が流れていますが、冷たい水を籠池で溜めておき、常温にしてから必要な時に周辺の田畑をうるおしました。



籠池(下の木樋) 樋管は松の丸太材をくり抜き、その上に蓋をしていました

聞き取り調査も大切

小字名で「籠池」と呼ばれる水田を調査。土地所有者は、水はけが悪く耕作に大変苦労があったと話されました。

調査を進めると、その場所はやはり池でした。籠池の中から木樋が上下の二箇所見つかりました(池の水量によって使い分ける)。

下の木樋は見事な造りでした。取水口をつなぐ木樋管は、松材を3本つないでいます(延長12.3m・直径53cm)。丸太材を胴割

りにして、内側をくり抜いていました。

米を災害からまもる工夫

『塔の坊』の川跡から発見された平安時代の木樋はせのたねは早稲の種のことと、種の品種が書かれています。(34ページ)

古代の種の品種の研究で、早稲・中稲・晚稲など15品種もあったことがわかつています。

複数の種類の種類を時期をずらして多くことで、播種にかかる人手を分散したり、風水害からの被害を最小限に防ぐ工夫をしていました。



寺跡（塔の坊）眼下に一般国道163号がみえます 昭和63年撮影

小字名に学ぶ

遺跡周辺には『塔の坊』『仁王堂』『規音堂』『井戸の上』『擁池』などが残り、寺に関する小字名もあります。

『塔の坊』周辺の発掘調査において、東西7.7m、南北7mの方形基壇が見つかりました。礎石の配置から二間×二間のお堂があつたことや、屋根には巴文軒丸瓦・唐草文軒平瓦などの瓦を葺いて

いたことがわかりました。

また、寺跡の近くから仏具や木簡や土器類が大量に見つかり、その年代から平安時代にお寺が建てられたことがわかりました。

この寺は小さなお堂ですが、出土品や小字名からすると、かなり大きな山岳寺院だったことがうかがえます。



幅約2.5mの川跡。その中から仏具や木簡などが大量に出土

寺跡の東側の川跡で、木簡・木製聖観音立像二体・金箔塗り光背・下駄・将棋の駒・中国磁器・茶道具・砥石など多量に出土しました。

木簡には、『寿永三年(1184=平安時代)・四至内參文』と墨書きされた題簽軸や、米の品種を書いた『はせのたね』、『妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五』『念佛西方佛』など、お経を書いたものが多数ありました。

寺参りは行楽もかねていた？

また、大量の食器類の出土から民間信仰の寺であったことをうかがわせました。

仏教に救いをもとめる人や家内安全を願うなど多くの人々がお参りしたことでしょう。



木製聖観音立像

高さ 13 cm

千体仏ともいわれ、お参りした人々が奉納したものです。

頭には宝冠、胸に蓮華の花をいだき、手足の先まで彫刻があります。

もとは彩色されていたのか赤い色がかすかに残っています。



将棋の駒

塔の坊の和尚さんの生活

朝に頭髪を剃り、来客があれこれ茶をたて、将棋をさして楽しみました。

寺の寄合いがあれば新調した衣に下駄を履き、きりりとした面立ちで外出したことでしょう。

豊富な出土品は、僧侶の生活も想像させることができました。



古道清滝街道



岩にも神がやどる

塔の坊のすぐ近くの調査です。ちょうど古道清滝街道にあたります。この道ばたから大きな岩やお地蔵さんが見つかりました。

大きな岩には神が宿ると信じられていました。この大きな岩の下からおまつりしたときの和鏡が見つかりました。

つらいことや悲しいことがあって、神さまに救いをもとめて鏡をお供えしたのかもしれません。





窯跡 炊口の幅約96cm・奥行き3.4m・高さ約2.4m・煙道の幅約25cm

鎌倉時代から室町時代にかけて流行した黒くいぶした瓦器椀を焼きました。このような窯が4基見つかりました。

写真の窯跡は四條畷市立歴史民俗資料館に移築保存しています。開館日であれば見学することができます。



清流越えの人々の食を支えた瓦器椀
螺旋もようが美しい左の茶碗
高さ3.4cm 口径11.4cm
黒くいぶして、汁物がしみてこないよう工夫されています。



地震の爪あと 本来、下にあるべき地層が上にのし上がっています

四條畷でも大地震

私たちの記憶に新しい大きな被害をうけた阪神淡路大震災。

平成8年、城遺跡において通産省寒川博士と合同で地震調査をしたところ、縄文時代から弥生時代にかけておこった大地震による生駒断層が見つかりました。この地震は、阪神淡路大震災以上の大震災でした。

*写真の断層を剥ぎ取ってパネルにしたて、市立歴史民俗資料館に保存しています。

災害を避ける方法

一般国道163号の地下深くは、もともと谷地形をなし、川が流れていきました。昔の人々は、地震・雷・日照り・大雨など災害をおこす自然の猛威におそれをいだき鎮めるために、この川で繰り返しまつりをしていました。川の流れが苦しみの原因をきれいに流し去ってくれると信じて、おまじないをくりかえしたのでしょうか。



表紙によせて

表紙に描かれている人たちは、みんな楽しそうですが、
いったい、この道を何人の人が通ったことでしょうか。

獲物をしとめて家族を喜ばす縄文時代のお父さん。特
別な勾玉をつけた弥生村のリーダー。石を運んでいる人
は古墳造りで忙しい。きらびやかな衣装の奈良時代の人。
そして小学校に登校する子ども。

時代を超えて、多くの人々に愛されている清滝越えの
道です。

題字 櫻井 敬夫

イラスト 佐野 喜美

〒575-0024 大阪府四條畷市塚駒町3番7号
四條畷市立歴史民俗資料館
TEL 072-878-4558

あとがき

『清滝越えの道—一般国道163号の発掘調査より』発刊に当たり、一言ご
挨拶させて頂きます。

清滝越えの道で示されています一般国道163号は、古くから大阪と奈良を
結ぶ交通の要所であり、今回の発掘資料から見てもたくさんの方々が往来され
ていたことがよくわかります。

今では、清滝越えの道は、一般国道163号として利用されると共に、新たな
道として清滝生駒道路を整備し、大阪東部地域から奈良北部地域を結ぶ重要な
路線として多くの方に利用して頂いています。

平成18年3月に中野交差点から清滝トンネル手前の約1.9km区間が4
車線開通したのを機に、清滝生駒道路の文化財調査をまとめたこの冊子が編集
されたことは、たいへん喜ばしいことです。

この冊子を通じて、みなさんの身近にある清滝の道について、新たな興味を持っ
て頂ければ幸いです。

この度、清滝生駒道路の整備に際し、埋蔵文化財調査で四條畷市教育委員会の
方々にご協力頂き、誠にありがとうございました。

また、この冊子を作成するに当たり、ご尽力頂き、多くの方々に感謝するとともに厚くお礼申し上げます。

平成18年10月

浪速国道事務所長